



認定特定非営利活動法人 海苔のふるさと会 会報

# 大森 海苔のふるさと館 ニュース46号

## 海苔の仕事着

海苔の仕事は、年間を通しての重労働、冬の寒さとの戦い、海中での作業という特殊性があります。季節ごとの作業と、作業に合わせた仕事着の工夫を紹介します。

### ヒビごさえ

海苔づくりは、夏の材料準備から始まります。

竹ヒビが主流だった大正から昭和20年ころは、竹ヒビを仕立てるヒビごさえの作業をしました。8月、河岸にはヨシズの日よけ小屋が建ち並び、前年の竹についたセッコロ（フジツボ）を落とす作業が始まります。

服装は、麦わら帽子に頬ほおっかむり、夏用の単衣ひとえのコテッポを着用しました。袖に竹ヒビの枝が入らないよう、コテッポはコハゼで手首がしまるように仕立てました。

「ガリ、ガリ」「コツ、コツ」と鉄のセッコロ落しで削り落とす音と、人々の声が入り混じり、このころの河岸はどこも賑やかでした。

竹は下枝を払い、根元には返しの小枝をつけました。9月の移植までに必要な竹ヒビを用意するために、昼夜を問わずヒビごさえの作業に追われました。



昭和33年夏、コテッポ姿で竹の支柱の準備  
(撮影：日高勝彦氏)

### ヨシ刈り

7月20日過ぎには、海苔簀のりすの材料のヨシ（葦）刈りが始まります。

麦わら帽子ほおに頬っかむりし、多摩川や鶴見川の河原に出かけます。刈り取ったヨシは、葉を落とし根元を切り揃えて持ち帰ります。風がヨシにさえぎられ、うだるような暑さの中での作業でした。また、品質のいい江戸川河口のカセヨシ（葛西葦）を購入することもありました。いずれも、10日ほど毎日炎天下に干して乾かします。

干しあがると、海苔簀編みの夜なべが每晚続きました。

### 種付け・移植

9月の十五夜前後になると、海苔の種（孢子）がよくつく千葉方



昭和10年ころ、千葉の種場にて振り棒で種付けのヒビ建て  
(大田区立郷土博物館所蔵)

面の漁場にヒビを運び、一度ヒビを建てる種付けが始まります。

漁場では、海苔下駄と振り棒で竹ヒビを建てる作業が数日続きます。コハゼのついたコテッポももいきに股引姿で、腰まで水みづに浸かって作業しました。戦後、海苔網のころには、胸までのゴム長靴も出回りましたが、若者は買って貰うことができずボータ姿で海水に飛び込んで作業しました。

約1ヶ月経つと種が発芽し、漁場へ移す移植いしょくを行います。早朝に船で千葉へ渡り、ヒビを抜いて船に乗せ、大森へ戻り、翌日漁場へヒビを建てる作業を行います。全てのヒビを移植するまで、数日間、竹を抜いたり建てたりのりすの作業を繰り返す、連日重労働が続きました。しかし、海苔の芽を見ながらの作業なので、辛くとも希望と張り合いのある仕事だったそうです。

### ボータを刺す

種付けや移植で男性が不在の間、女性は冬の作業で着るボータを刺しました。ボータは刺し子で、冬の海の保温と労働作業の布の補強の役割をします。すり切れると別布を継いで、その部分を縫い刺して長く使いました。

「チンチンこおろぎ、ボータ刺せやれ刺せ、浜からハマド（浜で作業する人）がけえってくる（帰ってくる）」と口ずさみながら、女たちも夜なべで冬の海苔のシーズンに備えました。

### 海苔とり

11月下旬から翌年3月までが海苔とりのシーズンです。

身を切るような寒さの中、頬っかむりに帽子、上半身はジュバンに腹掛け、その上にコテッポやポータをはおり、下は股引に前掛けをしました。昭和初めころは、ドテラ（綿入れの長着）姿で立ってベカブネをこいで海苔とりに行きました。コテッポやポータの上には、防寒の袖なしのチャンチャンコなども着ました。



昭和33.4年の冬、ベカブネで海苔とり

戦後になると、ポータの下にはセーターやシャツ、下はツルシンボ（既製品）のズボン、足は長靴といった服装に変化していきました。

海苔とりは、海水に手を入れるので、ポータの袖は左右とも七分袖が多く、中には初めから利き手だけ短く仕立てる家もありました。

冬は日中に潮が引かない日が多く、竹ヒビのころは片肌を脱いで肩まで腕を海中に入れて海苔をとることもありました。

### 海苔つけ

海苔を採った翌日の未明から、海苔つけが始まります。

服装は海苔とりと同じようにコテッポをはおり、下は股引、後にはズボンでした。海苔つけは水で前がぬれるので、必ず前掛けをしました。前掛けは、海苔問屋や海苔の資材屋などから、年末年始のあいさつの折に貰いました。



昭和33.4年の冬、未明の海苔つけ

(撮影：日高勝彦氏)

(五十嵐)

### ポータ

ポータは、主に海苔とりなど冬の海での作業で着ました。襟は和服のような仕立てで、木綿地に刺し子をします。使い古しの消防袴纏を仕立て直したものや、ミシンで縫ったものもありました。



刺し子は、冬の海の防寒と布の補強の役割をします。

激しい労働で布の消耗が激しく、切れたところに継ぎ当てをして補強し、長く着ます。二世帯に渡って着続けたこともあったようです。

肘までまくりやすいように、袖は薄手の生地です。左右とも七分袖に仕立てます。中には、利き手だけ短く仕立てることもありました。

### コテッポ

夏のヒビごさえ、秋の種付け、ヒビ建て、冬の海苔とり、海苔つけなどの作業では、袖さばきが良いように袖口を狭く仕立てた仕事着を着ました。



襟を和服のように仕立てて、脇から肘下まで長襦袢を付けたものをコテッポといいました。手首にはコハゼをつけました。

大正時代になると、シャツ仕立ての被布袴纏も登場します。洋服のような仕立てから若者に人気がありました。この被布袴纏もコテッポといいました。

どこへでもコテッポを着て出かける様から、「大森のコテッポ」と言われていたそうです。外出用は、作業とは別に着分けていました。(五十嵐)



### 企画展「海苔の仕事着展」

11月15日(日)まで、2階企画展コーナー

にて開催中！中富小学校から借用したものを中心に、実際に使用されていた仕事着を展示しています。

認定特定非営利活動法人 海苔のふるさと会会報「大森海苔のふるさと館ニュース」46号  
平成27年9月1日発行  
編集・発行 認定特定非営利活動法人 海苔のふるさと会  
連絡先 東京都大田区

平和の森公園2番2号

TEL 03-5471-0333

FAX 03-5471-0347

### 海苔のふるさと会 会員募集中!!

海苔のふるさと館をより良い施設にするために、ご協力いただける方を募集しています。詳しくはホームページをご覧ください。